

特集：レジャー・レクリエーション研究における基本書

社会学・経営学研究分野から

山口 泰雄*, 永松 昌樹**

A Review of the Literature on Leisure and Recreation
from Sociology and Management Perspectives

Yasuo YAMAGUCHI and Masaki NAGAMATU

人間のレジャー・レクリエーションは、時代における社会変化に大きな影響を受けて来た。超高齢社会、高度情報社会、成熟社会という特徴をもつ、21世紀におけるレジャー・レクリエーションを分析し、理解するためには、社会学や経営学といった社会科学からのアプローチがますます重要になっている。

レジャー・レクリエーションの社会科学的研究はイギリスやフランスのヨーロッパにおいてカルチュラル・スタディーズ派やフィギュレーション社会学といった理論研究が盛んである。また、北米においては、社会心理学アプローチによるフロー研究やツーリズム・レジャー産業におけるマネジメント研究など、さまざまな余暇行動に対して、多様な視点から基礎研究や応用研究が精力的に展開されている。

近年、わが国においてもレジャー・レクリエーションの社会学・経営学に対する関心が高まり、特に「生涯スポーツ、フィットネス、エイジング、ライフスタイル、フロー体験、社会化、イベント、マーケティング」といったキーワードの研究が増えている。ここでは、レジャー・レクリエーションの社会学および経営学を学ぶための基本書として、最近出版された5冊の文献を紹介したい。

ミハイ・チクセントミハイ著

今村 浩明訳「フロー体験：喜びの現象学」

余暇、レジャーに対してわれわれ日本人は、楽しさ

や喜びをまず最初にイメージする。しかしながら、現在の日本の社会では「時間の使い方」に対するマニュアル化が起こっており、その裏側に潜む「余暇への不安、心配」を探求されることは少ない。過重労働によって生み出された経済的な側面だけでの豊かさ起因するレジャー活動での貧困な行動や意識を、具体的な事例をもって認識すべき時期を迎えている。そのためにも「楽しさや喜びに関する社会心理学的な理論の整理」が不可欠となる。

訳者は著者と旧知の関係にあり、訳者による「あとがき」によれば、著者はシカゴ大学行動科学部の心理学・教育学教授であり、また、全米レジャー科学アカデミーのメンバー、そして、エンサイクロペディア・ブリタニカの編集顧問を勤めている。10章からなる本文は、さまざまな生活場面での「フロー」についての分析が施されており、それは余暇生活にまで及んでいる。その解説は、明快で、訳者が著者の研究を十二分に把握されていることがそのわかりやすさを生み出しているものと考えられる。さらに注釈を詳細に示しているため、著者の考え方がどのような経緯をたどって示されるに至ったのかを知ることが容易である。

著者が20年の月日をかけ探求してきた「楽しさ、幸福感」に関する理論の集大成として記されており、レジャー・レクリエーションを研究していく科学者が理解しておく最も基本的な理論の解説書として必携である。この本の前作として、著者と訳者とのコンビで出

* 神戸大学 Kobe University

** 大阪教育大学 Osaka University of Education

版された「楽しむということ」（思索社、1979年）があり、さらに詳しく「フロー研究」の流れをつかみたいと思われる読者には併読されることを推奨したい。（四六版／360頁／定価2,500円／世界思想社刊）

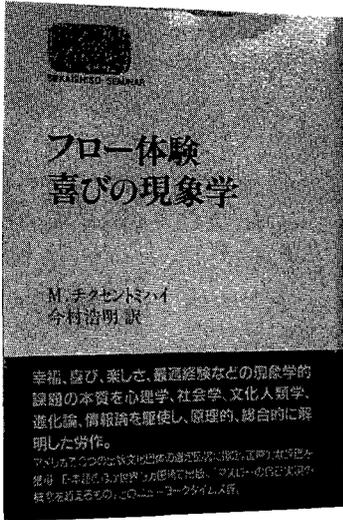


写真1. フロー体験：喜びの現象学

山口 泰雄著 「生涯スポーツとイベントの社会学」

本書には、「スポーツによるまちおこし」という副題が記されているように、筆者が関わった生涯スポーツの実際について、そのイベント、クラブ、都市づくりなどに着眼し、その詳細について報告されている。

全6章から構成されているが、第1章から第4章までは、国内の生涯スポーツの事業についてふれられており、第5章では国際的な生涯スポーツのイベントが取り上げられ、第6章で筆者がこれまでによって行われてきたフィールドワークによる研究によるまとめが示されている。それぞれの章で示された事例の数は、18箇所に及んでいる。

まず、「地域活性化とスポーツ」という視点から報告している。イベントの成功の要因として、大会運営に重要な役割を果たすヒューマンウェアに言及し、「市民ボランティア」の存在を強調している。

また、「スポーツと都市づくり」という観点から事例を取り上げ、各地で行われてきたイベントや施設整備について記されている。ここでは、ニュースポーツによるまちづくりや、新しいイベントや施設運営に注目し、成功した例が示されており、各地の特色を十分

に生かすという新しいコンセプトが示されている。

さらに「スポレク祭」と「ねんりんピック」、加えて国際的なイベントについて、その内容と開催による効果と今後の課題についてふれられている。

本書で特筆すべきは生涯スポーツに関係する語彙について、わかりやすく解説が付されていることである。このような丁寧な配慮は筆者が「はじめに」で記しているように、本書が生涯スポーツやレジャー・レクリエーションに関与する人々を対象とした入門書として書かれていることの表れで、その役割を果たすものである。（A5版／230頁／定価1,800円／創文企画）

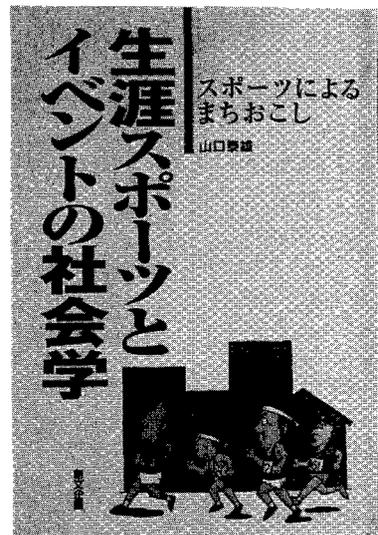


写真2. 生涯スポーツとイベントの社会学

山口 泰雄編著 「健康・スポーツの社会学」

レジャー・レクリエーションへの社会学的、あるいは経営学的なアプローチについて、特に運動や身体活動という側面を考察していくためには、スポーツやフィットネスの社会的な背景を把握することは不可避であろう。本書の筆者らは、その研究の手法のよりどころをスポーツ社会学、スポーツ経営学に求めながらも、レジャー・レクリエーションもその範疇に加えて記している。

本書は、スポーツ、健康づくり、レジャーなどの領域で活躍しようとする学生にとって、とてもわかりやすくまとめられている。さらに現在、実際にそれらに携わっている人たちが、現状について分析をするための入門書として必読書でもある。スポーツ社会学やス

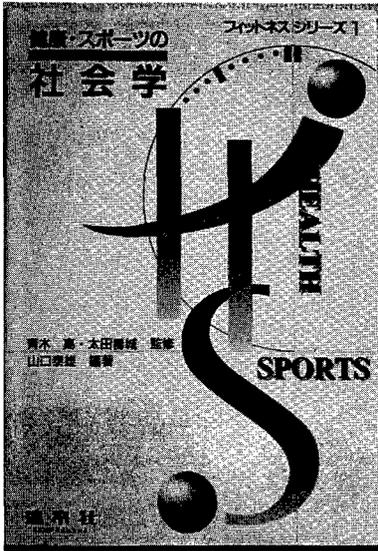


写真3. 健康・スポーツの社会学

スポーツ経営学に関する教科書として、近年の社会の情勢に合致した内容である。

社会的に生涯学習へのニーズが高まり、これと生活習慣性の疾病の存在があいまって、健康づくりのための運動やスポーツを生活の一部に取り入れることの必要性が示されてきているが、ライフスタイルや生活の質（クオリティ・オブ・ライフ）との関わりを考察している点が特筆できよう。学校、家庭、職場など現代の日本人のほとんどがどこかに帰属していることを意識し、あらゆる場面での健康づくりやスポーツの活動を網羅しようとしており、さらにフィットネス産業という近年のレジャー産業へも言及していることも、新しい試みとして歓迎できる内容である。

紙面に研究や統計的なデータなどがふんだんに使われているため、その改編などが定期的に行われることが求められるであろうが、レジャー・レクリエーションの研究や実務に関わる人々が、早急に必要な部分だけを選び、読み理解することができるような章立てとなっている。（B5版/176頁/定価2,266円/建帛社刊）

ジョン・クロンプトン/チャールズ・ラム著

原田 宗彦訳 「公共サービスのマーケティング」

本書は、レジャー・レクリエーションを経営学的に扱うために、不可欠なマーケティングの基本的な理論

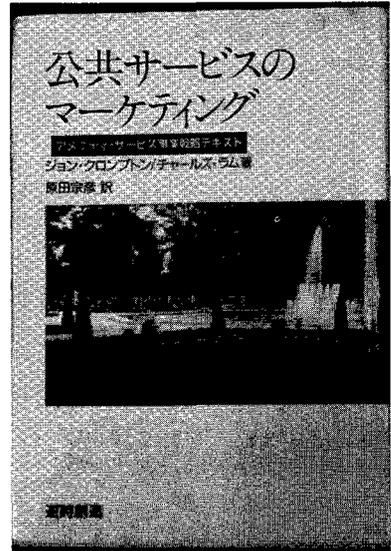


写真4. 公共サービスのマーケティング

とその考え方を示した英文を邦訳したものである。副題として「アメニティ・サービス事業戦略テキスト」と記され、その内容が、一定レベルに達したどのレジャー・レクリエーション事業にも当てはまるようにと、訳者の工夫が見られる。また、あえて、題に示されている「公共」ということを意識しなければ、民間や商業施設の経営に関わる人々も読者として対象となりうる。読者はそれぞれの事業にがいつかという場面を想起しながら、読み進められることが必要である。

マーケティングの必要性やその内容についても言及されているので、邦訳された語彙は平易ではないが、索引には原文も示されているので、これらを十分に活用し理解していくことによって「サービス事業におけるマーケティング」を把握することが可能である。

現在、生涯スポーツや健康づくりをまちづくりや都市づくりに活用しようとする地方自治体が増えてきているが、その事業に携わる人びとがそれぞれ、課題や問題点として陥りがちな側面（施設や器具などのハードウェア創造からプログラムなどのソフトウェア創造への移行）について、ヒントを与えてくれる教科書であろう。

内容がアメリカ合衆国やカナダなどの北米を中心に意識されて書かれていることは、訳書であるために回避できないが、重要な知識やその運用の方法について、読者の周囲を考えながら、そのマーケティングの適用

を考案することができる。また、全文ではなく割愛されてしまった部分（残りの7つの章）についても、どのような内容であったのか、その続編を期待したい一冊である。（A 5版／459頁／定価3,800円／遊時創造刊）

原田 宗彦編著 「スポーツ産業論入門」

本書の英文タイトルは、「Understanding the Sport Industry」とされている。近年、急速に広まったスポーツ・ビジネスをスポーツ経営学やスポーツ社会学を主領域として研究に関わっている若手研究者によって、記された入門書である。

スポーツ産業について、編者が述べる概要から、それぞれの研究者が研究のテーマとしてきた領域をわかりやすく説明しようという意図がうかがうことができる。しかしながら、この産業に対する研究が始められて間もないことや、著者らの研究自体が途上にあり未完成の状況にあることもあって、編者が「はじめに」の中で述べているとおり、「スポーツ産業に関する知識体系を包括的にまとめたものではない。」。

本書では、スポーツ・スポンサーシップ、スポーツ・ツーリズム、プロ・スポーツ、メンタル・フィットネスビジネス、パフォーマンス・ビジネスなど、これまでに刊行されてきたいわゆる体育やスポーツ、健康科学を専攻する学生を対象としてきた教科書ではふれられないことのない項目が記されている。この分野はレジャー・レクリエーション科学において、特に北米や欧州諸

国では学問の領域として確立されており、レジャー・レクリエーションを研究テーマとして取り扱う本学会の会員には必読の内容である。

レジャー科学において概念の定義や諸外国の実例などが教科書として取り扱われることがほとんどであったが、本書では具体的な流れや、分析の方法など取り上げられることの少なかった領域に言及しており、そういった側面を課題として取り上げようとする学生や実務者が基本的な流れを把握するための新しい流れの一端を示唆する教科書であるといえよう。

（A 5版／248頁／定価2,266円／杏林書院刊）

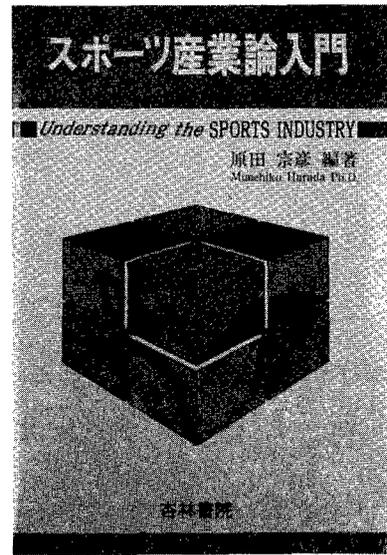


写真 5. スポーツ産業論入門